田舍莊子 附錄

子

へ遠 13
326
4

門へ遠13
號326
卷 4



## 莊子大意

抹帯遊び云。莊子と云れたものハ。別よ一雙服
とそ云へくらべし。洛西の文字とハ。山書式
うたしたかうまをいの論。常に一層一
層しらとしらく。はれむ格といひたりくこ名
自然ふ云てひ其意ハおしらく道ハ說
洛とん云とべうしび故とのもがいの有と亦道

此天下よあしくとかよ゚り是し莊子が拙見乃廣大なる天下を世を矯偽乃賊りと憎よむりそれゆゑ常に遏當乃偏おば除し或ハ五帝三王。周公孔子を毀りて。當世乃儒者。聖人の眞とハ知。徒ハ唯礼楽仁義乃迹ふうつりて聖人乃糟粕を貴ひく。道とよれよしを慣り。礼楽仁義聖人とよまふおやぶりて。道乃根りかきことを論ぜ。莊子。実ふ聖人を不知ふハあらぜ。堯舜孔子を毀るハ。實ふ堯舜孔子を

貴ぶなり。今乃儒者の貴ぶ所ハ。堯舜孔子の迹なり。其形迹乃堯舜孔子をおやぶりて。眞乃堯舜孔子をあらはさむとなり。末の天下の篇よおゐて。莊子が実ハ尊ぶ所を観べし。呂東坡乃いく。莊子が実ふ孔子を貴ぶよしを志るせり故よ又莊子孔子を譏りてども其が言の詆しをれ所多し。然よ所れ。至當乃偏ハ。他乃賢者の及ぶ所よあらざるを或ハ隠実の識偏をいなりへ。遠衷よ。或理を窮めと物を仮りく人

九年ヨハヘテトク。人ノ眠ト。惟ウシシテ硬シ
テ云リ。仏ノ方便ト云。意味アシク異ニ。荘子
ヲ道ヒ記ストク。大宗師ト云人父母ト云。死生
禍福。動静。治乱。共人父母ヨリ出ルト云命ヨリ安
ンジ。一毫モ其間ヲ意ヲ容ル事ナシ。
荘子ガ意也。僧ヨリ意ヲ容ル時ハ迹ヲ
迹アル者ハ。ウツリ沈ム。此ハ云テ
ニ悪ヲ云ヘシ。陰陽水火ノ道ヲ
何ヲ云也。物ハ害ヲ



迹アル物ハ。ウツリ。風雷雲雨ノ
又然リ。天地ハ人ヲ
感ル所アル。只道ヲ迹ヲ
ヲ絶ヲ。古今ヲ横益ヲ
ヲ絶リヲ形。最法ヲ
人ハ由ル。頭。
ク名ナク道ヲ
義先天ノ理也。聖人此理ハ不知ヨハ
故経ヨ云易無思無為寂然不動感ル通

通於天下之故と云へり惟聖人乃おしへハ。
道これ器と制し。器これ道と載せ。道器兼
備へく。遺ことなし。廣大と尽して精微と
尽し。高明を極めく。中庸よしる。百姓日用し
にして。其物の所以と云しれ。荘子の糟粕
見して。道乃廣大なるのとおられ。聖人糟粕中
庸乃道と蝉脱して。無畜乃体を措て當世の
儒者仁義礼楽を鄙く。道の真を失うりし
なり。故よ仁義礼楽の名をやぶれて傷れ



賊とさすれん。仁義とやぶるふハあらん。夫仁義ハ
人心自然乃天徳なり。渾然として。名付べ
きものをあらぬど聖人自性乃天徳を以人をし
らしめんかためよ。其發見乃所よ付して悟く
名を揚げ出して示りし。ゆふのミ。礼楽ハ天徳
に自然よ作く。其情を節しかみれ器也。中庸曰文
武之政布在方策其人存則其政挙其人
亡則其政息又曰礼儀三百威儀三千待其
人而後行苟不至徳至道不凝是ふとれて

んじて真とはざる所なり。礼楽刑政は糟粕
乃ち荘子の論ずる所乃仁義なり。仁義の迹なり。
荘子と雖ども論ずる所の道と雖ども。荒
唐乃言ふかづて。真道海内真とせず。荘子
は世の目と学ぶ乃ちあらしめ。大道は世
に荘子のみ。又荘子は世せん世聖学は大会
とかく荘子は世情を慎まべ。大小精粗の情と解
心術ふ益あらん
禅家の伝法所し。種を蒔せいも。荘子は

釈迦牟尼。高麗仏なり。世尊は邪魔なり。雲門
乃一棒は打殺して。狗子は拾ひ上げんくいか
ゝ。是なり。自性と仏と悟り。仏は悟り。仏
性は釈迦なり。我が心を求るのこと
かゝ。迷の
仏は求る者を愚乃也。
維摩詰。阿難と呼して云
はく。師を六祖乃子道なり。は師は弟子
仏祖はおのれ自しの維摩詰は醉く仏
心とも。故は釈迦也。ふ者やがて阿難



が愛仏なりまうんや。歟ばかり
或曰。荘子は禪ふらしく。云ふ。仏教
をいふる不あり。真大師。漢なり。仏氏を
二世と伝ふくやまだ。道化とんく紛雪した。
荘子は二世伝ふ。道化と以て大宗師
とす。子里は差なり。荘子は聖門乃別流也。
孔子曰。不得中行而與也。必也狂狷乎。狂者
進取。狷者有所不為也。
て用ひなるべうしば
ば

彈を。高遠と讀むべきいへども直ふ治つて其言曉しやすし。莊子ハ帝世乃文業をの妙意乃變化して見難くそゞろ難しとも世間濯れ言ふ解釋をゝ莊子ゞ大意をあ事せらもむ乃

莊子大意終



田舍莊子卷附録

目録

聖廟參詣
鳩之発明

# 田舍莊子卷之附錄

## 聖廟參詣

或人。如野。聖廟へ參詣し。立殿して曰。われ若よ仕る事。忠直なる。私なく。公武を忘して。淑業ふる。相勤る。僧侶。者。れ。そ。あり。立身出世おそれ。ら。て。常ふ。怠。い。ざ。記。ゆ。へ。明。る。此門。外。そ。れ。聖。世。の。術。を。明。平。乙。れ。微。よ。り。て。樂。業へ。怠。逆。せ。る。事。情。り。ふ。く。外。よ。す。せ。ひ。て。る。。実。乃。罪。そ。赦。ひ

のうんとの。市郎ひとりこの。死にくるを我が後
者代迎げ。我が胸懷と焼して焼こうれしの。
膳と碎く。祈りまこれ。東文。市郎の新しう。
白浦よ。浪紙鳶帽子着こうれ男。出るく
彼者ハ若く日吾を天神く奉へ。新社の
神子。海愚痴なれひとりて遠く
小来こうんこと。先ッも前乃神ハ。吉新し。長
上まく。山市郎へ来結せべ。を内神威あれ
命ぐ。を分こうへ。ねし。社堂乃うへ



ゆうんこと。彼男後ことしとめ。我が屋敷よ
を。門社まれ。只今ハ勿論住べしやを
い海。来社乃日。神を霊ハ体子。夏ハ
れ体まく。祝して後よ。不測のハあり神ハ
人心乃御よ感じ。私とん願くなうこと
郷とハ海とべうこと。故ハ神前ハ流とうく
其霊四代云ハ。来海者ハ。新心代流よう
つこと。ハ。海乃心体ハ。小合おう
流まり。代流あう代ハ。を人こう。神ハ通

ぶれ者を。山澆ふる所。淵常ふ。意欲の
發ふぶせく。ものくるしく。此發と云り。あ
悪れ塵と拂ひ。彼澆ぬ所ふ。澆ぬ
らるゝ所ハ。ものくるしく。食ふ所あるべし。淵が立ず
せぬ人食也。食ふ所あるべ天下悪ふ所
なく。胸懷とりぐ様ふして。沐の清ふ
とを知べし。天祥を食ふ安ひじかへ。淵ふ
がいふしられぬべしく。愚癡なる所沐よハあ
らじ。當社乃ハ猶ふ沐よ浴てさうと



なし。世人重病ハ病れる事といひ伝へく。肥ふる
ハ年乃時。淵病の中ふ懷數ぜじ。ものうく澆
文と云キ。年の沐ふ拾り付。屋上ふ昇りて。天
に鄉へハひ。死して魔天ハ詳とうり。雷
ふ成て。拂ふ中ふ雲りとなりて。ものくるもあり
ハせり。所ふ天祥乃當像と彫の者ハとそ仏
しく畫ゞとして。食りふ。淵ふ澆ぬ。澆
にくも亦祥り。是玄徳乃祥徳と云ふ
しくとのものゞ悪病ハ祥ハ。祥乃淵

心とゝろ。人式惑つて。祈けゞとゝ。
仏者乃幸異侯ゝ。
僧と頼んと願して。物を絶と焦し。天ふ祈る者
を。一向ゝ命と知ゝゞし。
病乃僧法師ゝものゝ。
ゝし道と以名式知りゝる者ゝを。常人
世乃事ハゝゝ取ゝ不著ゝ也。況や夏
ゝ忠孝。天地と感動ゝ。神法。天下
不知者ゝし。何ゝ所ゝて織ゝ。



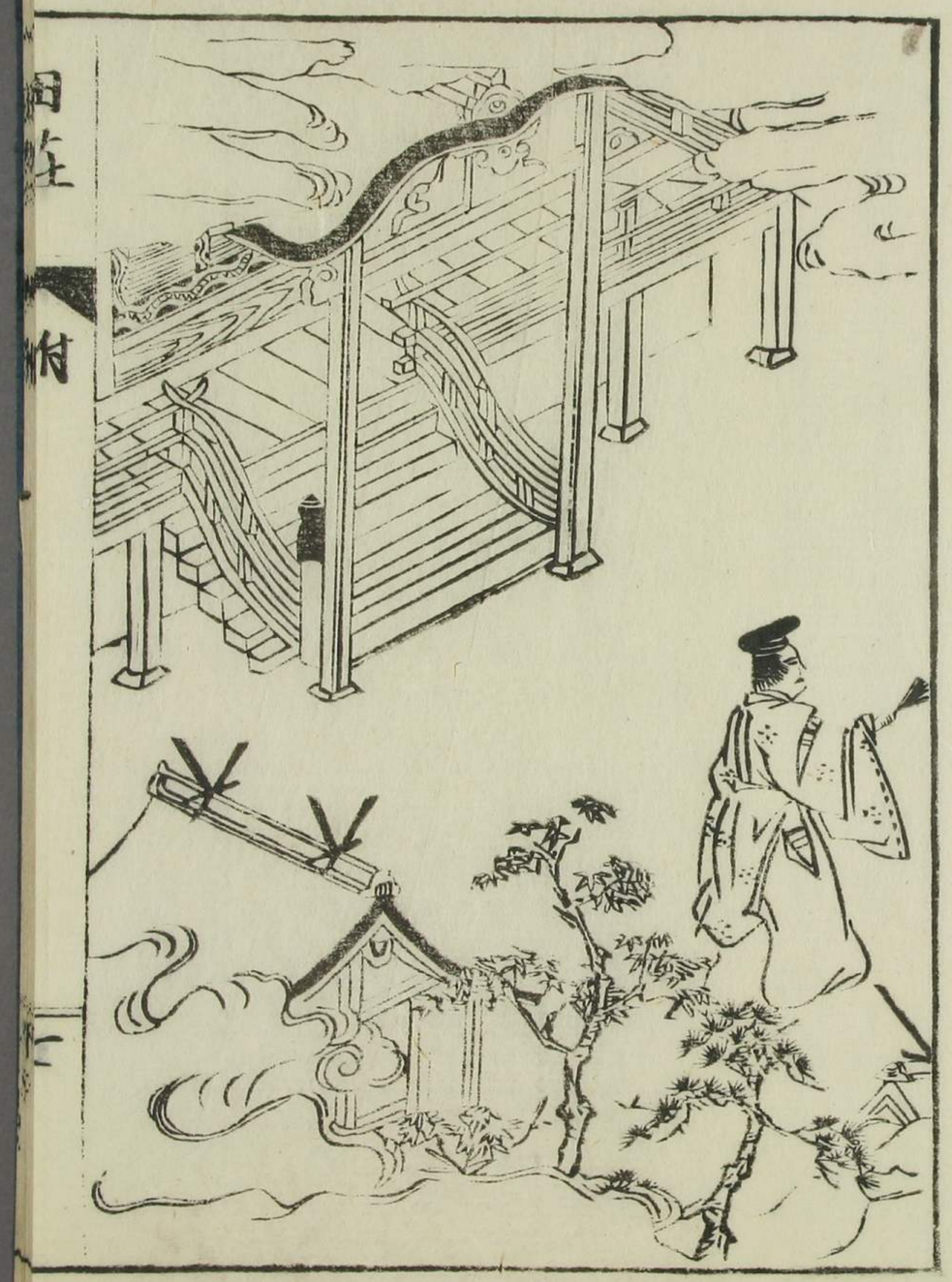
ゝりゝんや。ゝゝ書式ゝ。配ゝ
三年。一宮と申ゝ。都廣橋ゝ
ゝゝ登ゝ。親賢ゝ
出ゝ。ゝく詠ゝ。君ゝ門
と申ゝ。配ゝ
ゝ。

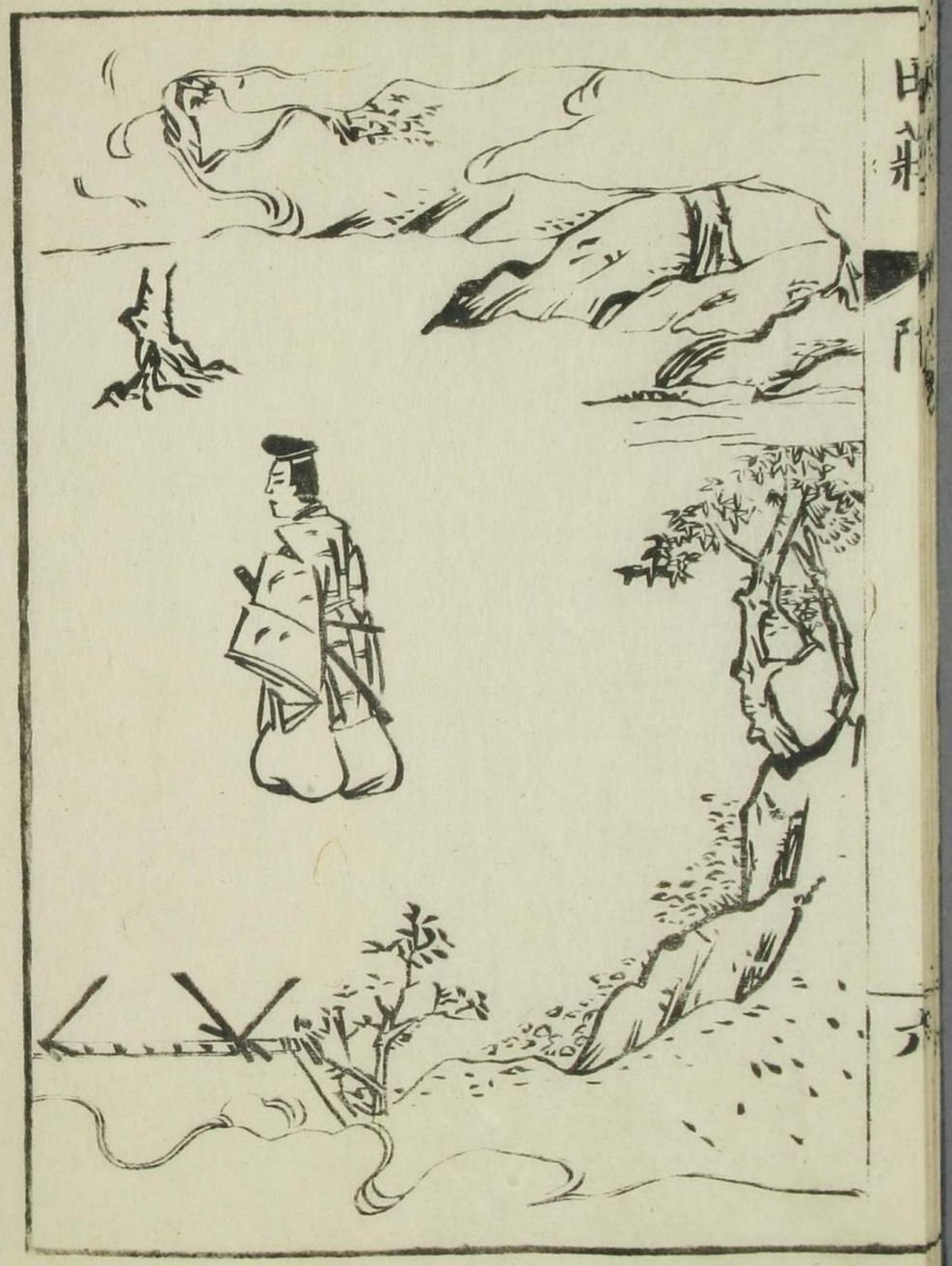
仲秋の詩ふ

去年今夜侍清涼　秋思詩篇獨斷腸
恩賜御衣今在此　捧持毎日拜餘香

此詩代是也。配所ふるくも。君と恋慕
くさぐさ忠誠ありかの侍ふ
ふも。一言も君と恋慕の徒者と問ひ給ふ詞と
不関。又菅公せの時の忠誠を天下の人ふ
と感動ありし。されしせふを作られ而
はじくさの所心をしべ。是天下の人情也。況
端蔡しきんや又莫云藤紫と倩
せしを。是喜えを幸面の歳也。配所
くく蒙じ給ふ。関三を賛美れ歳也。時年の

病死。同九年己巳の冬也。清涼殿より雷
乃降さるは。是長八年庚寅れ歳。莫云藤紫
じ給ふ歳。二十八年。一念の恩怨。仇の
陳入くく。二十八年れ久しきと待んや。徒者
れ滅亡時年八二十二を以て病死せり。又父
仏前。天皇洗耳門遊と悔ひ。莫云左遷
乃宣旨と。憍捨本官。優し。正二位と賜ひ
給ふ何乃恨と結しをり禁中人歎りとす
ひらむや。又清貫帝世と敷よしあらむ





あらべ波等の宿所人民溺死せる数しらべ。
何も禁中と淺うしらんや。走瀑風雷雨
法陽の変ありし。其説数ならべしるべし。
雷雨も。天下の人怪とせん。天地と動しる雷
雨也。怪しきもあらべし。法陽の変化
も。法師の術なるべし。山じ河の神
あらせられん。法も。我が法力といふもしらず怪
し事怪と。なげきあらべし。仏者の事
候ま。ゆしらぬまん。其公卿の忠徹仁



德も天下の人民溺死せる水難
ありて。此年夢じ事。天下の人怪
驚歌しく。安じやど。天下の人怪
氣候感動せん。天地の変異あれ所いり。
故に延喜十年大旱。同十三年大風雨雷
正月洪中火災。同年夏旱。聖年七月
日蝕光とうう。同十六年洪水。鴨川の水
溢る。同十七年夏大旱。洪水荒風。
同二十年。天大旱。聖年天保四年七月　夢じ

ゆふ。天皇懼給ひて。年号を改め給はん。
菅公左遷の宣旨と燒捨。正二位を贈り。
紙屋川人怪怪懼きく安じ給ひ。故に天皇
不豫延喜三年又畢魂し。同七年大水同八
年庚寅の年。雷清涼殿に降。是天下の
人怪れ安じ給ひ。天地と感動と
海面あらして。芳公の靈。響り渡りゆふ
あらば。天下の人怪おそれ。かくれ給ふ。安
じ給ひ。況や四年が恩を興し給ふ。



うう其恩を忘れ給ん。天は恩を以じ心を以
警。忠を本とうとき。冥に信ぜん人怪を
怪と信して。菅丞相忠義を。傳へ載る所の。
伯有が厲の鬼ふけあるべ。伯有が鬼人をう
菅公と同じ。信じ給べし
又叡山の慈覺大師の法へ。菅公は天の
ひ。我レ梵天帝釋のゆゑとうとり。禁中ふ
へく祀と祈。とうとび給ひ。
陰ざゆふかしい。意。不肖菅公念て

杖猫と執くらふ。妻戸ふさがりけるとて。妻戸ばかりあるしと。猫の意間はれの人消さる。其妻戸れ燒痕。人ふ殘つてそりさる。法へらる。是猫の意うはかれ幸姫とる。らんらあ。後人の猫作也。世でしく法は師ハ。ものの猫作。好しつべ。若実ふ乃猫の者来りそりやいと。是猫狸天狗みしの妖怪。又猫意が心魔とすべし。心魔とする魚禪家の書ふ載と。危て慢心乃



傍とべ。猫狸天狗乃ものに常ふ窺ひ。祈うとと云りて。猫意を侵ふ。天狗ハ祈りと云ふ人らり。上引ふ跡あり。猫意を侵り大徳乃法あるべ。ものいふ事あるべ。たちひ事りて物ふ事あり。たらと祈て。を法と祈ひ。ものとべし。人ふ法の事ふ。えべ。ず。我が法力れ名聞ふ。其燒ケ法りの妻戸と。秘法しく祈しとふ。乃。凡心ケしべ。法かして祈ふ事といりおして。猫ふ。其賢うべ法の

天狗ゆえりそれ事。古書におりく記せ。
又禪源よりは。坐禪の為ゆ。善をする事と
限るべし。皆我が心の魔ゝ。かしも来れゆ
あらじ。たゝひ仏菩薩現ずとしいえ。皆
妄語をしたるべしいなり。道ゆ志あゆ修ゆ仏
幸異をする事あるべ我が不滅をの事と
恥く。実ゝしてはそへて。人ゆ妖怪するをと
云わざど。偽く人ゆ驚く事ゆ。凡修ゆ
しても幸異をするしあらば。そもゆ修ゆ



猶して。仏ゆ凡分。我がほかの所をりとして。
人ゆ答をと求じ。我がゆの妖怪する事ゆ
知ゝど。人ゆ驚くの
禪の書よ記を。昔禪師ありゆ中に坐ん。
いづくたをく。孝ゆ一の尼と驚事あり。禪
師よ向く。笑して曰。禪所何ゆ我が母ゆ
驚しゆ。禪師見く。即元魔をする
事と知く。斧ゆ凡て。彼孝子ゆ斬る。孝ゆ
走て去ゆ。そは我が股の肉を握りすと見つ

をかうら見まゐ。血流る。ゑりう我が股にて
斬るべしとて。流レ禅師坐禅をする時。心
中に魔と起をなす。外魔逆が感じて禄
師乃心に入り来れ。色レ自心をなすに
らべしいなり。此禅師ゑりうを股と斬る
といへども。ゑりう長魔をなす為眼
此法を遠く。我が心に入れ。或る卒奏乃
幸ふ着して。直に魔界に入へ。魔ハ遠ゑり
生れ。ゑりうを。作法乃卒特せしをひて。

慢心生じ。天物を乞ものを乞べし。正法ふ
正卒特ゑい。宣海ゲ朝也御ゑば宣海を大
意ゑ知ゑしいへども。我を卒特とすして人
と敬くゑ。又後人附令して宣海に敬下ふ
血しむる
業薩院天慶六年。ふ寺乃僧日藏しいふ者。
死して十三日ふして蘇生し朝廷ふ奏し
て云。吾レ此間死して地獄に入閻魔の中
にして。廻善帝に知ゑ。帝我と拒

ふて宣く。彼大法師天神の邪心なり。日本に禁
とのり。おほく仏寺ほろぼす。焼き有り。害を加へん
彼を宿世の善根ふかしとて大威徳天神と為
故よ。彼が造る所の曼荼羅。皆これを受くべ
ふもつく我」等。代受くるなり。曼荼羅。西方の
にこそ帝に奏して。一百日。率都婆を立て我が
苦患を脱し。和漢いまだかつぐ。年代を
ぬ乃是なり。延暦寺帝とたがいしりぞけ
はくをゆるさひし。滅しやふ。天子彼の



妖僧が妄言を信じ。即一百日率都婆を
造立し。諸寺よ法華経を焼せ。法華経と相像せら
ひ。日蓮が妖言世よ伝へ書あもあらん。加様
なること。延暦帝乃時安倍氏。殺生禁断。
数をる所。殺生。殺生の罪も出あらん人。
仰く。怪なるあり法師ふ仏法。
此法といへども。見る悪がるあらあ
なるなり。仏法師乃妖言ハ。ぐるうぬたし
せい魚どもと。日蓮が法者ハ。乃至一人の

濁世乃ときなれば。朝廷と驚くなりけれ。悪と
まで思ふ僧へなく。怪れ愚人とてがくけごとく畜
獣の業とおもふしなり。天罰ゆるとかなれ者
なり。嗚呼。天下文明乃世なり。かゝる妖言誑
惑出しゝむれば。車ざれまと行るべきなり
なれば。議会なる事しなり。亦も我国乃天子れ
御帰依と。天皇の仏法流布ありてかく
のごとくあるべく。給よ写し。本尊を信仰
れ人乃再国なるなり。ゆゑ有言を謗ゆる



ふ書ふ記する事。人乃仏あるとあ。完成乃ち
に思ん。真利い朱雀院の御遠心なく。後伝
と。朝廷しめへばなりり起つく。天祖乃れ
濁世なる僧へふ獣りなる事し。ふ誇りもれ
で。彼男濁とおぐ。聖天子といまれも響ゆ。
延喜帝と。救ふとなるぬ。怖れれ。妖言ふく
死濁ふ乃悪鬼乃当社乃御祟り
彼妖僧乃高言なる。祟よるせゆひてと。社
忠臣の祟とゆひ濁されの事。実ふ命之

我ふるがふ為れとおもへらもてるなり。斯様
なるべき事にあらざるべし。今もなほひもろこし
うづして。同様なるなり。是より来れる
同く云。伯乃天狗といふ事。実にてらや。
未社曰。天狗といふ者。日本ふるくより天狗
と書ふ人も。惟ふ山祇魍魎乃類なり。実る形
ちり光見へば。人の天狗ようるといひ。
あれまぎらはしいふなり。異国乃人。丹薬と
服し山へ入氣を練て。真仙成隠して仙

者あり。既ふ仙くなる所を。換骨乃術ようる。
氣体ふ。変化をなすへしら。体ハ氣ふ依
て動き。氣ハ心乃命ふ所ようる。故ふ心変ず
れば。氣変じ。氣変ずれば。体変ずれ乃理
をもてべし。形ふ為ば。慢備氣乃精霊を降ひ
甚しく天狗ようれ事ようるべきなり。
主婆。絵ふ云ようる者と。皆山伏ふ紫式部ようる
ものと。其姿成ようとあれ者ようる。如べ
今社所ふ有乃。王れ鼻といふものハ別也

神代乃。猩々髭の金剛仮面。此金。諸神乃
さゝ拂ひと云ふといへり。又赤く鼻高き金剛
とゝいふ。又例乃仏者。閼伽金として。仏神守護乃
悪魔をしりぞけて。猩々髭の金剛仮面。天
狗乃面。滑稽さそうなかべ。金太きなめんなり。

## 鳩之発明

雉と鳩と。拾ふ。雉ぐうと。我ゝ用ふこと無ふ。
常に耳紙傾く。拙者音を聞き人。彩紙かくい。
義ふくを。人ゝ紙ぐるりと云ふ。人家



そこに而と家く。未だ出ずく解と求ひ。見程な
用ふてさへ。やをもれど。何ふだまされて。
打ものくらうとものお河。泥ふ少しそね
ぬを付して。何乃用ふ。もはく人器。屋敷ゆ遠
魚そこ行く。かく廣き不ともる庭。木乃枝ともも
とゆり居く。泥ふさふ。てゝ川りうゆいふく。
作とよぶ先ゝ云ふ。せめく。ふ声ふそり大海べう
し。分と云ふぬ。たゝりの。山よ。ゝ。ゝ。ゝ。里
へ出ゝ。そこぬゝ。鳩云。我ゝ性拾といへ

ども。身とこしらぬかげの事もなし。人の動へと
かりても捕まへんふなる事もなし。人が来
らば。逃去かくごのまへ。我もしらず。欲まよん山よ
へそれぞとく。人のゆるさぬべきの。大海の底に
あれ物さへおもはん入るとくごれそ。人の知恵之。
何方に居ても生バしりて命数来るべ。遁るゝ所
なれバ死の道せ。まゝて死ぬるまゝり膝も
しらず。居去とおもうぬまゝ。生ざかりて。人ハ
やつかれ身すらね者とあり。分別も如何ぞいハ

せぬとのを遁れ之命へ。生死を免るゝ物
ハ常なるを。人かくれんと悔もなし。我も亦遁
れの中に此一物なるを。天何ぞ我一人と祈して
私の僥倖とかさんや。天性の所為として世を移る
心だに誠の道にかなひなば
いのらずとても神やまもらん
是など縁撲なる所為なり。然ば命とさ
ど。人なふとつゝて。生死をこゝろへ死といふも巧を
愛して用心をば。持所断も急とれ心なし

わが法華経をもつぎうろへくたさるか
ゝ恵と立る所ふ常ま月ひくしても人まありう
とゝしもせ法華経ひ愚癡ふそ心ふ和
ゝ花ぶきく生ふる花ハ実しと
世ひ人ハ生死と含ゝ住せゝく世ふ廣くゝ花ひあ
つゝき無しゝて生滅と滅しゝひ生きしあら
ゆ法ゝ我と拙し我を法代愚癡ふりし
にまゝりむし良ふて知いまひとゝ人
ありの法禅信貴てゝまゝ法ゝ方ゝ武

わゝ又物と勝ゝまゝ生死と常にゝ職分て
ハゝ法ゝ拙ふふゝ方一人ゝ法ゝ行人ゝ法ゝ身ゝ人
年にゝひのゝ拙いまひしゝゝも年竟死ぬとゝや
ゝ出ゝ法ゝ我ゝ職分武ゝ人ゝ武
一句ふ聖ゝ夫ゝ以男知いまひゝゝ法ゝ無ゝ
て物いまひゝ法ゝ八法ゝ事ゝ実ハ拙事ゝハ
ら武常ゝ者ゝ法ゝ家ゝ法ゝ武ゝ見ゝ法ゝ滅
ゝ遠ゝ和ゝ法ゝ法ゝ見ゝ法ゝ実ゝ拙ゝ法ゝ拙
法ゝ山伏ゝ八卦ゝ法ゝ法ゝ行ゝ法ゝ法ゝ行

嘗り。元八回の祈はとあるべし。然れども。掃除して。
所を山伏と呼び集め。祈りてくれよと教てやりしに
程なくみな云あふ。常住座敷。濡れ。きぬ。又は畳か
すべて。狐狸もかぶる迄。一切のもの。皆我がんより逃て。
獨者し事と知べし。禄命の尽るは元来地獄也
死せざるを地獄と云べし。我と歩む。隨至とし。安
地震ふさまぞ。後生をもい新たり

田舍莊子卷之附録畢



余妙年時曾見此書而稱其嶺南
筆之一班可嘆尋常俳優悅人之
書大有逕庭久之併其名而遺忘
一日書賈某齎來示余〻再誦之
以爲非特尋常俳優悅人之書ふ
不及嘆哉知彬小技之册蓋之追
時好者亦有只書賈因語以上梓
之乎求余一語不止余豈有他說

耶直記之中與之云
丁未夏　水園　さ溪云

享保十二年丁未季夏穀旦
日本橋通壹町目　出雲寺和泉掾
天明四年甲辰仲冬求之
大坂塩町心斎橋西入　稲葉新右衛門蔵板

都會節用集　全一冊

此書ハ天地人の間ハ字ハ[illegible]ことしらさ[illegible]すれ[illegible]字[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]和漢諸家の名目を[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]用の玉家ハ[illegible]ハ[illegible]

字貫節用集　小本　全一冊

此書ハ上段ハ真字を畳引ハ後者ハ[illegible]字体を引[illegible]ハ[illegible]字[illegible]ハ[illegible]

唐明詩學聯錦大全　薄用　瑞懐　甲本　一冊

此書ハ唐明ノ詩家ニセレコキ連句ノ部類ヲ分テ韻字ヲ以テアツメ詩人吟咏ノ便ニスナワ誠ニ遊行詩会懐中ノ至宝此編ニスギタルモノナシ

浪華書林

北久太郎町心斎橋通北ヱ入
河内屋喜兵衛